

一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

① 現在の若者たちは、すでに成熟期へ移行した後の社会に生まれ育った人びとです。生活水準においても、学歴においても、一世代前のレベルを上回ったことが簡単に実感しえた右肩上がりの時代はすでに終わり、ほぼ平坦な道のりがつづく風の谷ならぬ高原の国に生まれ育ったナウシカのような人びとです。このような生粋^{きっすい}の高原人にとって、見上げるような高い目標を掲げ、輝かしい未来の実現へ向けて日々努力しつつ現在を生きることなど、まったく現実味のない^① 人生観^②に思えてもおかしくはありません。

② 二〇一八年七月、西日本は記録的な豪雨災害に見舞われました。その被害がもつとも大きかった地域の一つが岡山県総社市です。大量の雨によって住宅地の広範囲で土砂流入が発生し、また水分を吸収した薬品で化学工場が爆発するなど、甚大^{じんたい}な損害^{しこうむ}を被りました。

③ そんな大災害に見舞われた翌日、同市のある高校生が、ツイッターで市長にこんなメッセージを送りました。「突然、失礼します。これを見る暇^{ひま}はないかもしれませんが……。私たち高校生に何かできることはありませんか？ 配給の手伝いなどはできませんか？ 何かできるかもしれないのに家で待機しているだけというのはとても辛いです。子どもだから、できることは少ないかもしれませんが、ほんの少しでもできることはないですか？」と。同市長はこのメッセージに対してすぐさま反応し、「総社市役所に手伝いに来てください」と、やはりツイッターでつぶやきました。すると翌日の朝には、千人を超える高校生のボランティアが市役所に集結したのです。

④ 総社市の高校生は、ぜんぶ合わせても約二千人です。なんとその半数を超える人数の高校生たちが、総社市以外の友だちも引き連れて、寸断された交通網^{こうつうもう}のなかを自力でやってきたのです。また、そんな高校生の姿を見て、中学生やさらに小学生まで、自分たちにも何かできることはないかと集まり、市役所内での支援物資の仕分けや募金活動^{ぼくぎん}などに奮闘^{ふんと}しました。同市長もそんな若者たちの姿を見て、「よく頑張^{がんば}ってくれました。君たちの力は凄^{すご}かった。ありがとう！」と後日、ツイッターでつぶやき、彼らの行動を讃^{たた}えました。

⑤ このエピソードが物語っているのは、現在の若者たちは、本書で眺^{なが}めてきた人間関係の内閉化や生活圏^{せいかくけん}の分断化を、その気になれば軽々と乗り越える力をじつは備えもっているということです。そして、その力を引き出せる環境を作っていくのは、ほかならぬ私たち大人自身の役目だということです。総社市では、その前々年に九州で熊本地震が発生した際に、いち早く支援職員を同地へ派遣^{はけん}するなど、地域の垣根^{かきね}を越えたつながりの構築に取り組んでいました。その光景^{ひこう}を日頃^{ひごと}から目にしていた若者たちが、ここぞとばかりに立ち上がり、その潜在力^{せんざいりき}を発

揮してくれたのです。

⑥ ある問題に直面したとき、自分自身の能力でその解決が不可能なら、その能力に長けた人をインターネットで探してきて事態に対処する。自分に足りないピースがあったとき、わざわざ時間と手間をかけてそのピースを自分で作り出すよりは、そのピースを外部から探してきてさつと手早く埋め合わせてしまう。現在の若者たちは、そんな能力に長けています。そして、社会が平坦化している現在だからこそ、このような人的交流も可能になっているのだとすれば、それはまさに高原期の時代にふさわしい努力のかたちともいえます。

⑦ ④ そもそも努力とは何でしょうか。昨今の若者たちが考えるように、努力できるか否かも生得的な属性の一部なのでしょう。生まれついた資質や才能に差があることを否定はしませんが、しかし本来は、その能力の足りない部分を補う営みこそ、努力という言葉の意味するところだっただけです。だとすれば、個人の能力不足を自己完結的に補うのではなく、他者とのつながりによって補おうとする営みも、また努力の一つのかたちといえるのかもしれませんが。このように考え方を改めてみると、そして現在の若者たちのふるまい方を見てみれば、けっして努力への信頼感が失われているわけではないのかもしれない。

⑧ ① それでもなお、いま努力への信頼感に削がれている面があるとするれば、それは今日の ⑤ 社会の高原化によって、かつてのように超越的な目標を胸に抱きにくくなったからだと考えられます。だとしたら、内実のよく分からない異次元の目標のためにではなく、その営みの過程それ自体を楽しむことで、努力を続けられるようにしてみるのも一つの手ではないでしょうか。それは、なにか別の目標を実現するための人間関係ではなく、関係そのものを楽しむ自己充足的な人間関係を紡いでいくことでもあるはずです。そう考えれば、それはもうすでに多くの若者たちが営んでいるものともいえます。

⑨ 現在の若者たちは、シェアの世代ともいわれます。 ② クルマが必要になったらお金を稼いで買うのではなく、いま使っていない人がら借りればよいと考えます。もちろん、ギブ&テイクですから、いま自分に使う必要のないものは、逆に誰かに貸してあげればよいと考えます。そうやって世界を広げ、分断壁を軽々と乗り越えていける力を持っているのも現在の若者たちです。彼らは、自分の能力不足に自身の内部を改良することで対応するのではなく、人間関係を新たに構築することで対応することのできる世代なのです。

⑩ 今日のように流動性の増した社会で、一つのものごとに対してあまりにも強くこだわりすぎると、せっかく新しくチャンスが到来しているかもしれないときに、その兆しを見逃してしまうこともありえます。インターネットを活用し、全世界から絶えず新しい情報を摂取している

若者たちは、そのリスクをよく心得ています。そのため、なにか特定のことに没頭することは、 ③ 積極的に回避しようとしています。だとすれば、ひたすら一つのこと集中することではなく、もっと臨機応変に人間関係を構築していけるように工夫を重ねることこそ、今日の

努力のあり方なのだと考えを改めねばならないのかもしれませんが。それが、 ⑦ 高原期の社会に見合った努力のかたちなのかもしれません。

(土井隆義『「宿命」を生きる若者たち』)

注 ※1 ツイッター……ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)の一つ。「ツイート」と呼ばれるメッセージや画像などを投稿できる。

問1 ① 「人生観」と同じ構成の三字熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 未完成 イ 衣食住 ウ 初対面 エ 人間愛 オ 非常識

問2 ② 「その被害がもつとも大きかった地域の一つが岡山県総社市です」について、資料1の地図のA～Dではどの地域にあたると思いますか。記号で答えなさい。また、その理由を書きなさい。



この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図(箭田)を使用しました。

問3 ― ③「軽々と乗り越える力」とはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 居住地以外の地区が災害にあったとき、いち早く支援職員を派遣する力。

イ 地元の災害救援のために、かけつけてくれた若者の頑張りを、SNSでたたえる力。

ウ 災害で交通網が機能しない時は、危ないことをせずに、自宅で待ち続ける力

エ 居住地の近くが災害に見舞われたとき、SNSを使って、手伝えることを市長にたずねる力

問4 ― ④「そもそも努力とは何でしょうか」とありますが、その答えとして適切な部分を十四字でぬき出しなさい。

問5 ― ⑤「社会の高原化」とありますが、それについてわかりやすく説明している段落を一つ選び、番号を数字で書きなさい。

問6 ― 1 3 を補うのに適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ ところで ウ むしろ エ たとえば オ しかし

問7 ― ⑥「そのリスク」について、どのようなことか文中のことばを使って、五十字以内で説明しなさい。

問8 ― ⑦「高原期の社会に見合った努力のかたち」について、次にあげる具体例の中から本文の意図に合うものとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 時代の流れの速さを実感し、どのような状況であっても力を発揮できるように万能を目指すこと。

イ 自分で決めた将来の夢など、大きな目標に向かって日々精進し、能力を一途に磨くこと。

ウ 同じ場所での人間関係にこだわり続けるのではなく、さまざまな場に活動の拠点をもつこと。

エ 実現可能な小さな目標を一つひとつ達成することを目指し、大それた夢を見ずに自分にあった暮らしをすること。

二 中学一年生の「ぼく」(太二)が所属するテニス部では、昼休みのコート整備のメンバーを決める方法として、「グーパーじゃんけん」(グーかパーを出して、出した手の少ない側が整備をする)をすることが伝統だった。ある日、同じ中一の「武藤」が、「末永」を

「ハメる」ために、「末永」を除く全員にパーを出すよう仕向け、「末永」一人にコート整備をさせてしまった。本文はその日の夜、「ぼく」が「武藤」の指示に従ってしまい、「末永」をハメたことを悩みつつも誰にも言えないところから始まる。以下の文章を読み、

あとの問いに答えなさい。

父の麻婆豆腐でおなかはいっぱいになったものの、グーパーじゃんけんをおわらせるアイディアはおもいつかなかった。テニス部の連絡網はわたされていたので、いつそのこと中田さんに話してしまおうと、ぼくは携帯電話を開いた。

しかし、キャプテンに直談判して当番制にかえてもらったとしても、それなら誰がチクったのだろうと、一年生部員のあいだに不信感が生まれてしまう。やはり自分たちで解決するしかないと覚悟を決めて携帯電話を閉じたが、どうすればいいのかはわからなかった。

「神様、雨を降らせて、明日の朝練を中止にしてください」

寝るまえに三度も祈ったのに、いつもと同じ午前六時に目覚まし時計におこされて雨戸を開けると、空はよく晴れていた。一階では母が朝ごはんのしたくをしていて、父は母が帰ってくるまえに仕事に行ったという。

「学校でなにかあったの? おとうさんがメールをくれて、太二のことを心配していたから、おかあさん早引けしてきたのよ」

夜勤のときは午前八時で交替だったとおもいだし、ぼくは母にあやまった。

「心配させてごめん。でも、なんでもないんだ。おかあさんは、きょうは休み?」

「夜勤あけだから、あさつての朝まで家にいるわよ」

「そうなんだ」と答えながら、今夜は父と母がそろっているのだとおもうと、やるだけのことはやってやろうと気合いがはいった。母がつくってくれたベーコンエッグとトーストの朝ごはんを食べて、ぼくはラケットを背負い、かけ足で学校にむかった。

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声だしにまわる。

力試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝ったことがない。ぼくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスには歯が立たなかった。ただし、一度だけ中田さんから金星をあげたことがある。ベースラインでの打ちあいに持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからのモヤモヤを吹き払うためにも、ぼくはどうしても勝ちたかった。

ところが、やる気とは裏 A に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォルトを連発して自滅^{じめつ}。久保も、ほかの一年生たちも、手も足も出ないまま二年生にうち負けされて、^③ これまでにない早さで勝負がついた。「どうした一年。だらしがねえぞ」

キャプテンの中田さんに命じられて、ぼくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきっているので、みんなの姿を見ずに走るのなんていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかった。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔^{こうかい}しているのだ。足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート整備を当番制にかえてもらうようにキャプテンに頼^{たの}もうと言いたかったが、おもいきれないまま、ぼくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走^{しつそう}となり、ぼくは最後まで先頭を守った。

「ボールはかたづけておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分を過ぎていたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがっても今日はやるなよと ^④ 釘^{くぎ}を刺しておきたかったが、息が切れて、とても口をきくどころではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑^{うたが}いだせばきりがなののも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうの

しかえしに、末永がなにかしかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしてもうしあわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がつきつぎ頭にうかび、これはおもっている以上に厄介^{やっかい}だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けてもらうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおmoiをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいっていなかったが、ぼくはようやく ^⑤ 自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下^{ろうか}に出ると、武藤が顔をうつむかせてこっちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問^{こもん}の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあけたのではないかと、ぼくはおもった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。たつぷり怒^{おこ}られるだろうが、それで ^⑥ ケリがつくならかまわなかった。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。^⑦ ぼくは落胆^{らくたん}するのと同時に自分の甘^{あま}さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張^{きんちよう}で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがぴくぴく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況^{じきよう}で、きのうはハメて悪かったと末永にあやまったら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よいいなことを言いやがってとうらまれて、末永だって怒^{いか}りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふつうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーかパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて収拾がつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援しているぼくたちにむかってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョキに見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「太二、わかったよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言つてグーからチョキにかえると、とがらせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかつてその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキにかえて、輪のなかにさしだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もなし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そう言つて、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかった。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いていると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大腿でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大腿になってブラシを引いていく。

ぼくたちはこれまでもよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もっともつと強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐を食べさせてやりたいとおもった。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもい、押入れにしまつてある四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかつてVサインを送った。

(佐川光晴 「四本のラケット」)

問1 — ①「直談判」、 — ④「釘を刺して」、 — ⑥「ケリがつく」のここでの意味をあとの選択肢から選び、それぞれ記号で答えなさい。

①「直談判」

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| ア 相手に直接相談するように持ちかけること | イ 相手に直接判断してもらうようにお願いすること |
| ウ 相手に対して自分だけの直接的な判断を下すこと | エ 相手に対して直接話し合いをもちかけること |

④「釘を刺して」

- | | |
|----------------|--------------|
| ア ひどくいたためつけて | イ きつちりと念押しして |
| ウ しつかりと証拠をつかんで | エ きつくしかつて |

⑥「ケリがつく」

- | | |
|--------------|----------------|
| ア なんらかの決着がつく | イ なんらかの打撃をあたえる |
| ウ なんらかの指導が入る | エ なんらかの不安が消える |

問2 — ②「やるだけのことはやってやろう」とは、何のための行動ですか。「ために」に続く形になるように——②より前から十五字でぬき出しなさい。

問3 本文の空欄Aに入る体の一部を表す語を漢字一字で答えなさい。

問4 — ③「これまでにない早さで勝負がついた」理由として考えられることで、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「末永」が昨日、グーパーじゃんけんでハメられて一人でグラウンド整備をすることになったのに、今日も「末永」が試合に出ることになったから。

イ「末永」一人にコート整備をさせてしまったことを反省した「ぼく」の、どうしても勝ちたいという気持ちが空回りしてしまったから。

ウ「末永」をハメて彼一人にコート整備をさせてしまったという昨日からの後悔や不安、不信が晴れず、誰もがテニスに集中できなかったから。

エ「久保」が、「武藤」や「末永」なら上級生に勝てると期待していたのに、あっさり自滅してしまい、やる気がなくなってしまったから。

問5 — ⑤「自分のすべきこと」とは何をすることですか。文中のことをばを使って、四十字以内で答えなさい。

問6 — ⑦「ぼくは落胆するのと同時に自分の甘さに腹が立った」のはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「武藤」が自分のしたことを先生たちに打ち明けたと思っていたのに、それは「ぼく」の見込み違いで、状況がまだ何も変わっていないかったから。

イ「武藤」が自分のしたことを先生たちに打ち明けたはずなのに、キャプテンや先生は誰も来てくれていなかったの、ひどい人たちだと思ったから。

ウ「武藤」に自分がしてしまったことを打ち明けてほしかったのに、まだ打ち明けていないことが分かり、「ぼく」から言うしかないと思ったから。

エ「武藤」が自分のしたことを正直に打ち明けることができなかったことが分かり、「ぼく」には手助けできることが何もないと思ったから。

問7 — ⑧「武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかってその手を突きだした」とありますが、「武藤」がそのような行動をとったのはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「末永」をハメたのは自分たちであることを「末永」に明らかにして、申しわけないという謝罪の気持ちをみんなに示したかったから。

イ自分が「久保」と「ぼく」の仲間になることで「末永」にも自分がしてしまったことを許してほしいという思いを示したかったから。

ウ昨日みんなにパーを出すように仕向けたことに対して、「グーパーはやめよう」と言われたので、今度はみんなにチョキを出させようと思ったから。

エ「久保」の「グーパーをやめよう」という申し出を受け入れて、自分が「ぼく」や「久保」と同じ気持ちだということを示したかったから。

問8 — ⑨について、各問いに答えなさい。

i 「末永」がチヨキに変えたことでグループ内のグー・チヨキ・パーはそれぞれ何人になりましたか。組み合わせとして正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア	グー… 六人	チヨキ… 四人	パー… 十四人
イ	グー… 八人	チヨキ… 八人	パー… 八人
ウ	グー… 八人	チヨキ… 四人	パー… 十二人
エ	グー… 六人	チヨキ… 八人	パー… 十人

ii 「末永」が「自分の手のひらを見つめながらパーをチヨキにかえて、輪のなかにさしだした」のは、どのような気持ちからですか。

その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア せっかくグーパーで人数の多い側にいたので本当は変えたくなかったが、「久保」から「グーパーはもうやめよう」という申し出があったので、あえて人数の少ないところに行こうという気持ち。

イ 「久保」や「武藤」や「ぼく」からの「グーパーはもうやめよう」という申し出に同意して自分が少ない人数の側にまわり、誰かが自分をハメたことも気にしないということを示す気持ち。

ウ 「久保」と「武藤」と「ぼく」からのVサインを受けて、昨日は嫌な目にあったけれど今日からはこのグループに入れてもらって、平和に過ごしていきたいという気持ち。

エ 「武藤」も「久保」も「ぼく」もグーパーじゃんけんをやめたがっているので、もうこれ以上、人数の多い側のパーを出していても意味がないからチヨキに変えてしまおうという気持ち。

三 次の①～⑩の——線部のカタカナを漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 友達の家をホウモンする。
- ② 栄養がホウフな食材。
- ③ 真っ白なイシヨウを着る。
- ④ 各国のシュノウが集まる。
- ⑤ 会社のギョウセキが悪化する。
- ⑥ 寒暖の差が激しい国。
- ⑦ 電車の車窓から景色をながめる。
- ⑧ この誤差は許容の範囲内だ。
- ⑨ 準備をして大会に臨む。
- ⑩ 先生の話に納得する。

